

(別紙様式4-B)

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

都留文科大学

天野 峰瑞

今回の留学は、私にとって学びの多い実りのある、充実したものとなりました。その中で、特に様々な面で痛感したことは、「ダイバーシティ」でした。アメリカは多民族国家の代名詞的存在であり、実際に私自身も、様々なルーツを持つ友人が現地でできました。現地の友人たちと関わっていく上で、感じたこと、学んだことが多くあります。以下は、私が留学を通して「ダイバーシティ」について私なりに考えた、感じたことのまとめです。

「ダイバーシティ」(diversity)という言葉を日本語にすると、よく「多様性」と翻訳されます。「多様性」と一言と言っても、多くの多様性が存在します。日本でもこのダイバーシティの必要性が論じられており、現在ではLGBTQ+などの多様性、人種の枠を超えた多様性などがよく話題に挙げられています。

留学に行く理由の一つとして、「自分の可能性に挑戦したい」、「新たな自分を見つけたい」ということが挙げられます。実際に現地の友人も“Get out from my comfort zone.”（自分の居心地の良い場所から離れる＝新たな土地で新たな自分を発見する）と、留学は見ず知らずの地で新たな自分にチャレンジする、出会う機会であると話していました。私も例に漏れずその一人であり、知らない土地で一から努力してみようと意気込んで日本を離れました。私は日本人の両親をも

(別紙様式 4—B)

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

ち、日本で生まれ育ち、日本人に囲まれた環境で、日本式の教育を受け、日本の文化の中で育ちました。海外には過去に留学・語学研修の数回程度しか訪れたことはなく、今回が初めての長期滞在でした。異文化の中に身をおいて生活したことはなく、今回の留学では、毎日が新鮮なものでした。その中でもやはり印象的であったことが、私の感じた、ある“違和感”でした。先にも述べたように、私は当然のように日本人家庭に生まれ育ち、日本人に囲まれて育ちました。ですが、一度海外に出ると、そこでは当然ですが私は“外国人”扱いです。私はそのギャップに大きな衝撃を受けました。私の留学先大学は地方の大学であったため、教室に入ると9割が白人、その他0.5%ほどが、アフリカン・アメリカン、アジア系などの人種で、純粋な外国人（留学生）は基本的に私のみでした。留学当初はさほど気にはしていませんでしたが、関わりを持つにつれて、次第に違和感を感じるようになっていました。決して嫌がらせや差別を受けたということはありませんが、言葉の壁や、同じ文化グループでしか分かち合うことのできないような話題や空気感があると、ある種の疎外感を感じた覚えがあります。特に言語の壁は大きく、グループ活動内での討論等では、言語に関する知識量に大差があるため、なかなか加わることが躊躇われました。対して、イギリスやカナダなどの英語を母国語として話す国から来た友人は、アメリカ人の輪にすんなりと溶け込めており、言葉の壁と文化への親和度は比例していることを痛感しま

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

した。もし自分が英語を周囲と同レベルで話すことができたなら、もし自分が英語を話す人の文化に幼少期からふれていたら、と実現不可能な想像をしていました。言葉・文化の壁が教室内に存在し、自分が介入できない。この感覚は、日本では味わったことのないものでした。反対に、同時期に留学していたアジア諸国出身の友人といると、不思議とこの違和感を感じることはありませんでした。細かな文化的な違いは見られますが、同じアジア諸国から来た学生の中で、ある種の安心感を抱いていることを強く感じました。この時私は、“ナショナルリティ”という大きな括りに囚われていることに初めて気付きました。単一民族国家と言われる日本の人口は、98%以上が“日本人”という統計が示すように、日本語を使う環境で生まれ育ち、周囲も自分と同じ文化・特徴を持つ人々に囲まれて育った私は、異国の地で、さらには多民族国家で生活して初めて”マイノリティ”としての疎外感を感じました。自分が稀有な存在として他の人に見られていないか、好奇なものを見るような目で見られていないかなど、必要以上に気にするようになっていました。このような感覚について、何度か現地のアメリカ人の友人と話をしたことがあります。私の友人も、似たような経験があるようで、その中でも特に印象的な例をいくつか紹介します。

一例目は、アジア系の家庭で生まれ育った友人のケースです。彼女は生まれも育ちもアメリカで第一言語も英語ですが、外見がアジア系で、私自身も初めて会

(別紙様式4-B)

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

った時日本人かと思間違える程でした。彼女はその見た目から、差別を受けたことがあると告白してくれました。見た目の観点から、周囲と馴染むことができない、育った環境の文化の違い等を話してくれ、当時の自分と重なる点が大きく、非常に共感できることが多々ありました。また、彼女の話から、彼女が20年以上かけて、その悩みを解決してきた努力と苦勞が伺えました。

二人目は、エチオピアから養子としてアメリカ人白人家庭に迎えられた友人です。彼女は10歳の頃、養子としてアフリカのエチオピアからアメリカへ引越してきました。引き取られた当初は、文化の違い、言語の壁が大きく、苦勞したそうです。10年経った現在では、言葉で苦勞することはありませんが、彼女のルーツであるエチオピアの言葉を忘れつつあり、再び学ぼうとしているようでした。彼女との共通点は、まさに差別という点でした。コロナウイルスの蔓延によって世界各国で混乱が生じている今日、世界各地で“アジア人差別”が起きているというニュースを耳にしました。マスクをしていると病原菌扱いされる、アジア人（もしくはアジア人の見た目をしている）という理由だけで暴行を受けるなど、どれも痛ましいものばかりでした。幸い、私の友人たちや周囲の人々は理解のある人が多く、恐ろしい経験をしたことはありません。ですが、私の日本人の友人で、都市部に出かけた際に暴言を投げかけられたり、差別的な発言（通りすがりの人にコロナと呼ばれる等）を受けたりした、という話を聞き、悲しさ

(別紙様式4-B)

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

と同時に恐怖心を感じました。比較的安全で、落ち着いた地域だと感じていた自分の居場所が、急激に危険で、精神的に居心地の悪い場所を感じるようにすら思えました。言葉の不自由なわたしは、そのような場面に遭遇した時、どのように対処したら良いかを考えると、外出すらも億劫になりました。まさに、差別の波がすぐそこまで迫っているような感覚でした。私の友人も似たような経験があると話してくれました。アフリカ地域でエボラ出血熱が流行した時、アメリカ国内でも黒人をターゲットに差別的発言や暴行を受けるなどの事件が起きたそうです。彼女が実際に差別を受けたか否か詳細は聞いていませんが、彼女自身もアフリカ系に属するため、そのような報道に脅かされていたと聞きました。

自分が差別を受ける側になる、自分が批判される側になる、周囲の敵意を感じる。そのようなある種の強迫観念のような感覚は20年以上生きていた人生の中で味わったことのない衝撃でした。世界各地で現在もヘイトが行われている実態を知りはしていましたが、どこか他人行儀であったようにすら思えます。世界中の誰もが混乱している中、このようなヘイトが蔓延している状況も、自分がその渦中に置かれないとその辛さややるせなさを理解できないことに、大人になった今改めて気づかされました。それと同時に、ナショナリティという観点で自分がマイノリティとして位置づけられた時、その疎外感に困惑することも、この留学で経験しました。

(別紙様式4-B)

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

この経験を通して私ができることは、「マイノリティに目を向ける」ということです。マジョリティの環境の中で生まれ育ち、様々なことで多数派に属して生きてきた私ですが、自分自身がマイノリティに置かれることによって、マイノリティの窮屈さ、息苦しさを実感しました。今や世界進出する日本の企業も少なくありません。社会との関わりの中で、外国人とも触れ合う機会は今後も増え続けると思います。そのような社会の中で、わたしは実際に異国の地で生活をし、味わった空気感や、疎外感を常に念頭におき、また良き理解者であり続けたいと心から思っています。日本でも、“ガイジン”という言葉があるように、訪日外国人をあまりよく思わない人や、トラブルに発展した事例も耳にしたことがあります。グローバルな視野を身につけることは異文化を理解することにつながると思います。日本でも外国人の中に、おそらく私の味わったような疎外感を感じた人がいるかもしれません。わたしはその気持ちを理解し、寄り沿っていけるような人材になりたいと考えています。

(別紙様式 4-B)

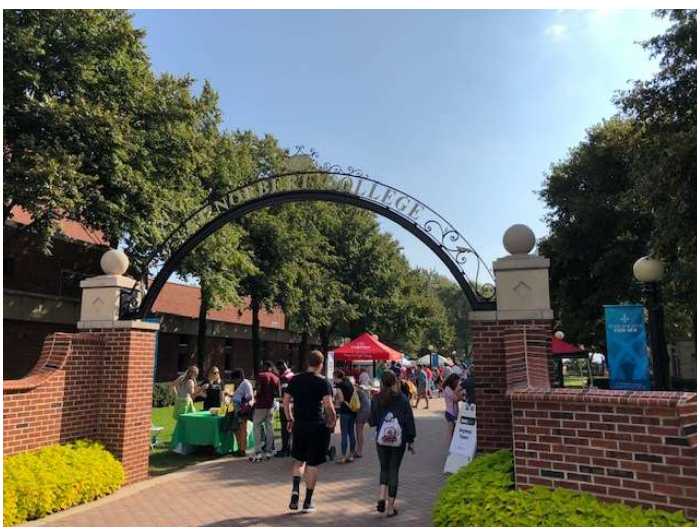
山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書



大学キャンパスの雪景色。厳冬期には最低気温マイナス30度になることも。



川辺に建つキャンパス。



大学キャンパスでの学園祭。グループでの出店だけでなく、地元の店の出店や世界各国から来た留学生による、プレゼンなど。

(別紙様式 4ーB)

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書



ウィスコンシン州最大の大学、ウィスコンシン大学・マディソン校構内にあるアメリカン・フットボール場。ウィスコンシンはグリーンベイ・パッカーズというアメリカ国内でも優勢なフットボールチームのホームであるため、スポーツも盛ん。



大学キャンパスの付近の川辺。キャンパスから車で 15 分ほどの場所に、グリーンベイ・パッカーズのホームスタジアムがある。



大学付近の街の様子。落ち着いた雰囲気がある。カフェ等も立ち並ぶ閑静なエリア。